

# 植民地における笥克彦の活動について

## —満州を中心に—

西田 彰一

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

笥克彦は独自の神道思想を唱えたことで著名であり、かつ数多くの植民地官僚や神社関係者、農業移民の指導者に影響を及ぼした人物である。しかし、これまで笥が植民地に対してどのように向き合ったのか、その活動を具体的に検討した研究はなかった。そこで、本稿では笥克彦の植民地における活動の事例を分析することを試みる。特に、これまでまとまった研究がない満州での活動を中心にその全体像を明らかにしたい。まず第一章では笥の朝鮮半島訪問から、笥の植民地に対する基本的な立場をみる。続く第二章では、台湾訪問の際の講演から、笥の植民地序列化の論理を検討する。さらに第三章と第四章では、最も大きな足跡を残した満州での活動から、笥が植民地に対して実際にどのような役割を果たしたのかを論じる。そして最後に、笥がなぜ植民地で内地出身のエリートたちに支持されたのかを明らかにする。

笥は内地と植民地を分け隔てなく考えた人物であるとされている。だが、基本的には(優れた日本対遅れた植民地)の二項対立にたっており、植民地の人々は教化の対象であった。彼の台湾での講演に代表されるように、笥は日本と植民地の序列をつくり、天皇崇敬の名のもとに帝国を統合しようと試みた人物であった。

こうして、笥は教化の立場から植民地と向き合っていた。それでは、笥は実際の植民地の問題に直面した時、どのように対応したのであろうか。これについては、「満州国」における彼の活動が最も参考になる。笥は建国大学の創設委員を務め、さらに彼は満州国皇帝溥儀に進講をしている。笥の考えでは、満州の文化は朝鮮よりも優れている。だが、台湾よりは劣るものであった(台湾>満州>朝鮮)。そして、満州移民は日本の精神を満州に伝える役割を果たすとされた。しかし、その一方で、実際に植民地と接する場面では思うような成果を発揮できていない。笥は建国大学の創設委員であったが、笥の思想は満州国の日本人官僚たちに拒絶された。また、溥儀への進講も、「満州国」をあからさまに日本の天皇の下に置くものであったので、到底受け入れられるものではなかった。

これでは、笥は結局植民地の実態に影響を与えなかったと看做すことができるかもしれない。だが、笥はその思想の固さ故に本土出身のエリートから信頼された。笥は天皇を仰ぐ日本古来の神道(古神道、神ながらの道)は生命すべてを天皇の下に輝かせる宗教であり、それを信じれば皆がまとまると戦後に至るまで一貫して主張していた。笥自身が植民地に抱いた率直な感想は優れた日本人対劣った植民地の人間というものであった。だが、そのように精神的に経済的に劣った植民地人であるからこそ、日本から来た内地人が模範として振舞い、教化しなければならないと説き続けたのであった。笥が植民地に与えた本当の影響とは、彼ら内地出身のエリートに自己正当化の知的枠組みを与えたことにあると言えるだろう。この「内向き」の知的枠組みこそが、却って彼らを勇気づけ、日本人のコミュニティの中だけで通じる自己正当化のアイデンティティーの形成を手助けしたのである。

キーワード：笥克彦、神道、朝鮮、台湾、満州、溥儀、教化

はじめに

1. 箕克彦の植民地に対する基本的な立場—朝鮮半島への渡航（1922年）を例に
2. 箕克彦の植民地支配の論理—台湾渡航時の講演（1930年）より

3. 植民地における箕克彦の活動（1）—建国大学創設委員として（1937年）
4. 植民地における箕克彦の活動（2）—満州国皇帝溥儀への進講（1944年）  
おわりに

## はじめに

箕克彦は独自の神道思想を唱えたことで著名であり、かつ数多くの植民地官僚や神社関係者、農業移民の指導者に影響を及ぼしている。たとえば、満州移民を指導した加藤完治は、箕克彦と出会ったことで、思想的転回を遂げたと述べている<sup>1)</sup>。また、同じく農本主義者であり、植民地朝鮮における農村振興運動で重要な役割を担った心田開発運動を指導した山崎延吉にも影響を与えている<sup>2)</sup>。箕が思想的影響を与えたのは農本主義者だけではない。文化政治を主導した斎藤実総督の秘書官であり、植民地政策の人事に大きく関与した守屋栄夫も箕の教え子の一人である<sup>3)</sup>。神社界においては、朝鮮神宮の宮司を務めた高松四郎が箕から思想的影響を受けている<sup>4)</sup>。また、台北帝国大学の増田福太郎や井上孚麿のように、箕は自らの思想に近い者や教え子を植民地の大学の教授陣に送り出している<sup>5)</sup>。

近年磯前順一は、箕は神道を普遍的宗教として植民地にまで押し広めていこうとした思想家であったということを指摘している<sup>6)</sup>。さらにこの磯前の議論を取り入れて、青野正明は植民地朝鮮における神道の実態について画期的な研究書『帝国神道の形成—植民地朝鮮と国家神道の論理』（岩波書店、2015年）を著している。青野は従来の国家神道の研究が日本中心主義であることを批判し、「天皇崇敬システム」としての国家神道の本質は、寧ろ植民地朝鮮にこそ表われていると述べる<sup>7)</sup>。青野は国家神道には日本を中心に据え、植民地の人々を帝国に序列化する帝国主義的ナショナリズムの機能があったと主張

する。そして、この帝国主義的ナショナリズムの形成に深く関与した人物として、穂積陳重、加藤玄智、川面凡児らと並んで箕克彦をその重要人物の一人として取り上げている<sup>8)</sup>。

そこで、本稿では磯前や青野の成果に学びつつ、箕その人の植民地での活動の事例を分析する。特に、これまでまとまった研究がない満州での活動を中心にその全体像を明らかにしたい<sup>9)</sup>。まず第一章では箕の朝鮮半島訪問から、箕の植民地に対する基本的な立場をみる。続く第二章では、台湾訪問の際の講演から、箕の植民地序列化の論理を検討する。さらに第三章と第四章では、最も大きな足跡を残した満州での活動から、箕が植民地に対して実際にどのような役割を果たしたのかを論じる<sup>10)</sup>。そして最後に、箕がなぜ植民地で内地出身のエリートたちに支持されたのかについて述べる。

## 1. 箕克彦の植民地に対する基本的な立場—朝鮮半島への渡航（1922年）を例に

箕克彦が植民地で活動を始めたのは第一次世界大戦後からである。息子の箕泰彦によれば、箕克彦は「徹底的に日本人の精神的救済のための普及及実修に乗り出そう」と決意し、積極的に日本全国に講演を行うようになったとのことである<sup>11)</sup>。日本全国に講演を行うなかで、1922年（大正11年）にはじめて植民地に渡航した。これは、朝鮮総督府の依頼による講演旅行であった。

朝鮮総督府では1918年頃から、箕克彦の教え子である石黒英彦（1884年～1945年）や守屋栄夫

(1884年～1973年)ら内務省出身の若手の官僚たちが、寛の影響を受けた「神ながらの道」や寛の考案した「日本体操(やまとばたらき 皇国運動とも表記する)」の普及に努めていた<sup>12)</sup>。寛の朝鮮講演の実現に関しては、彼ら教え子の若手官僚たちの後押しも大きかったと思われる。寛は1922年7月11日に朝鮮半島を訪れ、8月6日まで滞在していた<sup>13)</sup>。その際には総督府の官僚の案内で朝鮮の各地を訪問し、当時の斎藤実総督と共に明治天皇没後十年の遥拝式に同席する等、総督府からも好待遇のもてなしを受けている<sup>14)</sup>。

寛の植民地に対するエピソードは、「朝鮮服を身につけて講演」したという出来事が有名である。息子の寛泰彦によれば、寛克彦は「これは日本服だ、日本の一地方の風俗服であるから少しも差支えない。君等の来ているもの……こそ、日本の服じゃない。西洋服じゃないか」といって、朝鮮服で過ごしたと語っている<sup>15)</sup>。寛の教え子で朝鮮総督府秘書課長を務めていた守屋栄夫も、朝鮮ホテルで開催された寛の歓迎会で「寛先生は朝鮮服を召された」と当時の日記に記録している<sup>16)</sup>。この出来事から、寛泰彦は「朝鮮統治の根本は、朝鮮の人々と、その人間としての深い心の底において一つに結び合うことこそ、神ながらの精神であると信じていた……もう一つは、日本の神社などの、外側の型式のみを力でおし付けるような役人たちに対して、その目をあけてやろうという意味もあってしたこととされます」と述べ、寛克彦は日本の内地と植民地の朝鮮半島を分け隔てなく接した人物であると述べている<sup>17)</sup>。

しかし、寛克彦が実際に朝鮮に対して抱いていた印象は決して芳しいものではなかった。寛は後の講演で「朝鮮は土地も貧寒、天産物とといつたところで、林檎や人参といふところでせう、到る處で気の毒」な思いをしたとか、あるいは「朝鮮には信仰といふことが、まるで人民にないのです、苦力にいたるまで政治論を戦はずといふ風で、現実的な方面だけが顕著でして、

超越的なところが少しもないのです」と述べている<sup>18)</sup>。決して差別意識を表には出さなかったものの、基本的には(優れた日本対遅れた朝鮮)の二項対立にたっていた。

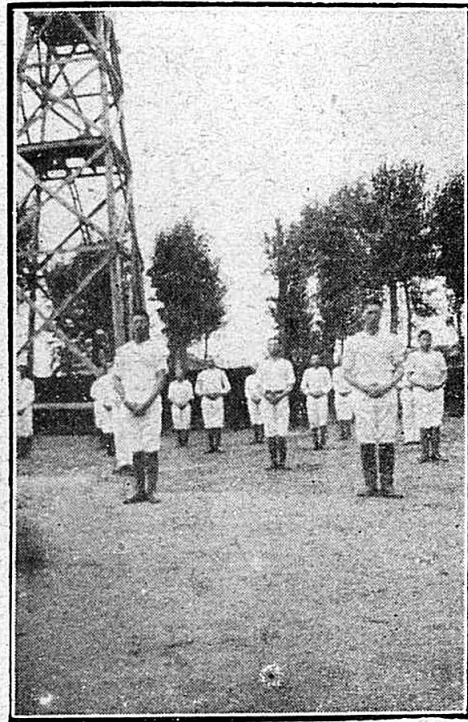
また、平安北道新義州警察署を訪問した際に、寛は自ら興味深い写真を撮影している(図1)<sup>19)</sup>。それは、寛自らが考案し、石黒英彦が伝えた体操である「皇国運動」(やまとばたらき)の実践の様子である<sup>20)</sup>。この皇国運動については現在別稿を準備しているので、詳細はそちらに譲る<sup>21)</sup>。本稿では皇国運動の要点についてのみ触れておく。皇国運動(日本体操とも言う)とは、寛が独自に生み出した体操と神道の祈祷を組み合わせた身体技法である。大正期において宮中で実践され、昭和戦前期には加藤完治や山崎延吉の訓練所でも行われていた<sup>22)</sup>。この体操は個人の人々の身体を、本来の一心同体に統合するという思想に基づいている<sup>23)</sup>。また体操の動作には、記紀神話の各場面を身体で表現するという意味が込められている。例えば体操には天岩戸神話で行われた小竹葉をふる動作が取り入れられている<sup>24)</sup>。また、天照大御神を寿ぐみことのりの唱和がその体操の一部分として採用されている<sup>25)</sup>。

そして何より特徴的であるのが、記紀神話の場面を身体で再現することで、総てを善へと転化させようとしたことである。日本は建国の当初から健全な気分やいのちの純粋な輝きを取り入れ、「美はしく同化し、善美なるものみに宿を與へ、有り難く懐かしき事項に転化」しているので、凡ての物事は最終的には調和し、善へと転化する<sup>26)</sup>。そして、日本固有の記紀神話を再現するこの体操を実践すれば、「いのちの靈光の輝」を自覚でき、世界の諸民族諸国に対して「他の模範」として振舞えるとまで述べている。こうして、寛は体操を通して、模範国としての日本を説こうとしたのである<sup>27)</sup>。ただし、寛の唱える皇国運動/日本体操は神話を再現すると言いながらも、イザナギとイザナミの黄泉国での別れやスサノオの追放は体操の中から省略され

法學士石黒英彦氏の傳へしもの

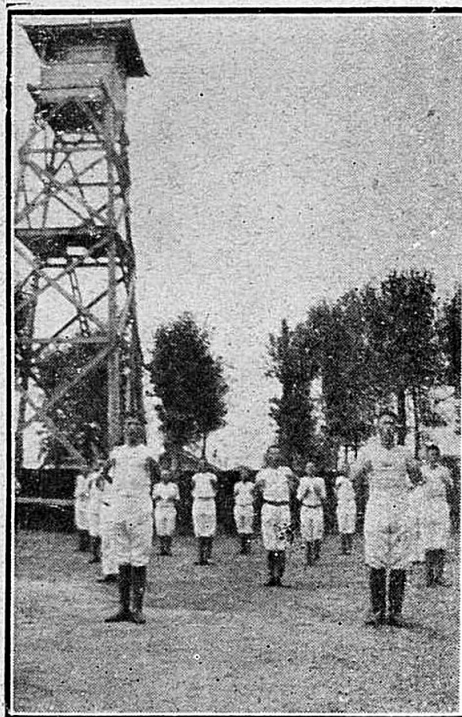


れ上る參



めづしまたみ

朝鮮平安北道新義州警察署に於ける署員の「やまとばたらき」



木榮眞津百五



て棄け抛

二五八二、大正十一年夏寛克彦自ら撮影

図1 平安北道における皇国運動の実践

ている事については触れなければならないであろう。

寛克彦は朝鮮半島を訪れた際に、総督府から直々に手厚い歓待を受けていた。またその際に朝鮮服のエピソードが寛の公平性を示すものとして強調されているが、実際は植民地の人々を平等にみていたわけではない。基本的には（優れた日本対遅れた朝鮮）の二項対立にたっており、朝鮮半島をはじめとする植民地の人々は序列化、教化の対象であった。また、寛が提唱し、守屋栄夫や石黒英彦ら総督府のエリートたちに実践させた皇国運動／日本体操は、人々に身体を通して天皇の下に「帰一」することを求める体操であった<sup>28)</sup>。寛は、この皇国運動／日本体操の実践を通して、植民地の人々を日本の天皇制支配の下に教化しようとしたのである。

## 2. 寛克彦の植民地支配の論理—台湾渡航時の講演（1930年）より

それでは寛克彦による植民地支配の理論について、彼が台湾渡航の際に行った講演を例に明らかにする。寛は1930年（昭和5年）1月に台北帝国大学から特別講義の依頼を受けて十日間ほど渡航している<sup>29)</sup>。台湾に対する認識は、先述した朝鮮と異なり「台湾の人々は幸福相にやつてゐます」とか、「台湾に行くとそれ（信仰—引用者注）が清潔で、信者も熱心」であると述べているように比較的印象がよい<sup>30)</sup>。ただし「神様に頼りきつて安堵して生活を営み、内地の施設は寧ろ生活の手段として、利用してゐるにすぎない様」であると、やはり内地に比べて精神的に劣っているという見方をとっている<sup>31)</sup>。

このような台湾の現状に対して、寛は次のような講演を行っている。寛は朝鮮や満州などの植民地には「内地の思想その他の欠陥が、千波万波をなして押し寄せてゐます。そこでは人々が心の奥底をもつて生活してゐるのではありません」と植民地の現状を厳しく批判する<sup>32)</sup>。そこで、「植民地の事柄は、たゞ表面だけ叮嚀にし

てみても駄目であつて、心の奥底を捕まへてやるのが大切」であると教化の必要性について述べている<sup>33)</sup>。方法としては、「生蕃の精神の中に輝けるよいところを、いよいよ生かし、その精神の上に生活させるやうに」する<sup>34)</sup>。現地民の心をとらえた上で、万世一系の天皇を中心に据え、「あらゆる種族が混然として一つになつてゐる」日本に「帰一」していくべきであると唱える<sup>35)</sup>。

また「国体精神と台湾」という別の講演では、内地人、本島人、高砂族との違いに言及し、三者三様の違いはあるものの「神ながらの精神に立ちまするとき、既に已に根本に於て内地人も高砂族も絶対に我が国体精神に合一し、我が国体を基礎として各人其生活の形式等の違ひを分担し、各々幸福に皇御国の弥栄を表現しつつあることが泌み泌みと感ぜられます」と述べている<sup>36)</sup>。同年に霧社事件が起きることを考えれば、十分な現状認識を欠いていると言わざるをえない。だが、寛は「本島人」が豊かな自然の中で伸び伸びと過ごすことができるのは「我が国体精神、其の淵源にまします万世一系の天皇様の御霊のふゆ」のおかげと述べている<sup>37)</sup>。つまり、まだ「本島人」が国民としての自覚に目覚めていなくても、彼等が生活を楽しむことができるのは天皇の神秘的な力のはたらきによるのだから、将来気づくように指導していけばよいと寛は述べているのである。

寛が自身の思想の根幹についてより具体的に語ったものは、台湾教育会で講演された「台湾神社の御祭神に就いて」である。寛は講演の中で、台湾神社の主神であり「台湾第一の神様」であるオオクニヌシを取り上げている。オオクニヌシの神話は「現実の方から言っても、それは人間の本質として人間の歴史に現はれて居るが、神様の行動として申せば神様が色々人間を鍛へておいでになるその過程その段階を示すものに外ならぬのであり同時に神の試練の段階であります」として、その神話には人間の発展の理想が描かれていると説き、その段階を五段階に分

けて詳しく述べている<sup>38)</sup>。なお、本論文は『神ながらの道』の三章を基に、台湾神社の祭神の石柱であるオオクニヌシの役割について述べた講演である<sup>39)</sup>。

第一段階は「自らの力のみを恃む時代」である。自らの力のみを頼って兄弟神に負け続けたオオクニヌシは、根の国に赴いて祖先である「須佐之男の神様の魂」の力を貰い受ける。この祖先の力を得たことで、オオクニヌシは「国土の経営」の使命に目覚める<sup>40)</sup>。

次に第二段階の「力による征服の時代」である。「御神勅を背中に負ってこれを以て祖先の生命に合一して国土を経営なさる」オオクニヌシは、「権力を以て兄弟でも反抗する者は追伏せ」追い払った<sup>41)</sup>。しかし、この支配は力にのみ頼っていたので、途中で行き詰まってしまう。

そこで、国土経営の完全な達成を期すために「幸福主義の時代」が始まる。この第三段階でオオクニヌシはスクナビコナの神と出会い、彼の知恵を借りて「世の中の安寧幸福を増進」しようとする<sup>42)</sup>。オオクニヌシはスクナビコナから、国土の経営には「勇壯邁進の心」<sup>43)</sup>による荒魂<sup>あらみたま</sup>だけでなく、より本源的な心である「有難く懐しみ思ふ心」<sup>にぎみたま</sup>和魂も、それ以上に大事であるという実地教育を受ける<sup>44)</sup>。これによってオオクニヌシの国土経営は大きな進歩を遂げるが、結局はスクナビコナから借りた知識でしかないので、未だ「一心同体の共同生活」には程遠い<sup>45)</sup>。オオクニヌシがその本領を発揮するのはスクナビコナと別れてからである。

オオクニヌシはスクナビコナと別れた後、スクナビコナが代替して表現していた和魂は、実は自分自身の心の中にも存在することに気付く。第四段階である「信仰の時代」の訪れである。本当の信仰に目覚めた大国主神は「御自分の和魂と御自分を超越して」祀りあげた<sup>46)</sup>。ここで寛はオオクニヌシの行動を評価し、次のように述べている。

人間の生活に於ても色々の形式がある。形式の違いは決して心配するには及ばぬ。唯根本に於て帰一せざるについても他を責めるには及ばぬ、さう気づいた人自身が先づ改めてゆくべきである。内地人を責め本島人を責め、高砂族を責めるには及ばぬ。先覚者自身がその根本の心を以て行きさへすれば、それが段々民衆のうちに徹底して行く訳である<sup>47)</sup>

こうして臣民としての本質を確立したオオクニヌシは「臣民の本質の神様として、即皇孫命たる万世一系の天子様を永遠に守護り奉る神様として御活動」するようになる<sup>48)</sup>。これまでオオクニヌシが活動をしていたのは、高天原の種子を蒔くべき畑の準備をしていたのであり、総ては最後に天照大御神の御魂である御位種子神<sup>みくらだなのかみ</sup>の魂を招くためだったのである。その種子の本質を「お百姓とも申すべき開拓者である 大国主神様」が見極めて、アマテラスを迎える<sup>49)</sup>。これによって、国土の経営は完成する。

寛は台湾神社の祭神がオオクニヌシである理由を、台湾が未だ発展中の神の国であるからと述べている。寛は開拓の神であるオオクニヌシが神としてその力に目覚めていった過程に一体化することを期する。寛はオオクニヌシを武力統一から文化（スクナビコナ）、信仰（オオクニヌシ）に目覚めて、内地の神であるアマテラスの魂（ミクラダナ）を受け入れる存在として描き、それを台湾の人々にも期待する。つまり、台湾の人々は天皇の統治を受け入れたオオクニヌシを通して国民になるのである。こうして一段階を置いた天皇との「帰一」関係の形成を説くことは、まさしく青野が説いた天皇崇敬システムと言えるであろう。本章では台湾の講演の事例から、それを改めて確認した。これより、満州における寛の活動の実態の解明にとりかかる。

### 3. 植民地における寛克彦の活動 (1) 一建国大学創設委員として (1937年)

寛が植民地に対して最も大きな足跡を残したのは満州である。満州では、建国大学の創設委員を務め、さらには満州国皇帝溥儀へ進講まで行っている。それでは、実際の植民地の問題に直面した時に、寛はどのように対応したのであろうか。本章では寛が建国大学の創設委員として満州でどのような活動を行っていたのかについて、その満州認識及び北満視察の詳細、建国大学の創設委員としての活動の実態を明らかにしていきたい<sup>50)</sup>。

寛が最初に満州に渡ったのは1929年の旅順への旅行である<sup>51)</sup>。この時の印象は朝鮮半島ほどではないと前置きしつつも「満州へ行くと、何となく面憎い様な感じがした」とか、「人民の幸福さへ維持して貰へば、どんな神様だつて構はぬといふのですが、それが雑然として荒んでゐるのです」とあまり良い印象ではない<sup>52)</sup>。こうした意識は道中の和歌で「御鳥居にまがへしものと思ひしに満州固有の門なりといふ」と詠んでいるように、1937年の渡満時でもさほど変わらなかった<sup>53)</sup>。なお、1937年に渡満した時は日中戦争の開始直後であるが、寛自身は当時の騒動を殆ど歌に詠んでいない。数少ない言及においても、寛は「北支那の事件に匪賊は彼処此処其のいたづらを試むといふ」という和歌を詠んで、殆ど問題視していなかった<sup>54)</sup>。

満州を訪問した際に、寛は関東軍の軍人たちと共に7月19日にハルピン郊外の移民訓練所（飯島連次郎所長）を訪れた。その翌20日にロシアとの国境視察、21日に工藤儀三郎・佳木斯の弥栄千振村村長である工藤儀三郎と第一次移民団長山崎芳雄を激励し、22日に牡丹江を経て新京に戻るといふ北満視察を実施している<sup>55)</sup>。

満州移民については、自身の弟子である加藤完治が推進していたこともあって、かなり良い印象を抱いている。開拓団の村においては「弥栄の精神に照かる若者を慕ひ来れるを□（ふ脱

カ）とめにやある」、<sup>ちふり</sup>「弥栄は純日本名千振はも日満両語の習合にして」、「弥栄の移民の生せる乳呑まば病は直ちに禊がれぬべし」のように、非常に好意的にとらえている<sup>56)</sup>。また、同村では22日の朝に講演を行っている。その一方で、腹痛に悩まされており、またぬかるんだ道に悪戦苦闘する歌も残している<sup>57)</sup>。

満州移民については、「国民高等学校生徒を満州へ送るの辞」に詳しい。寛は「日本精神を以ていよ—渡満されるのであるが、この精神を以て始めて満州が救へるのである。それが無いから救へもしなければ又あちらのことを悪しきまに云はねばならなくなるのである。こちらが充実して居れば、天地間は皆美はしい所を持つて居るのであるから況んや人間たる満州人に於てよい所が目につくことは当り前のことなのである」として、自らの充実こそが、満州人を救い、満州人を悪く言うことはなくなると述べている<sup>58)</sup>。

寛にとって満州の印象は、朝鮮半島よりは良いとしながらも、さほど評価できるものではなかった（台湾>満州>朝鮮）。その一方で、満州移民は日本の精神を満州に伝え、満州人を変え、満州人を救うと主張している。だが寛は満州開拓によって生じた現地民の土地の接取や、異邦の地で過酷な大地で開拓に励む移民の労苦については言及していない。同行者である娘婿の正木は、移民の苦労にある程度関心を持っていた<sup>59)</sup>。だが寛には、そのような認識は全く見られない。「弥栄の村を眺めに眺めつゝ湧き出る涙止めかねつる」にみられるように、ただ移民の開拓の成果に感動したに過ぎなかった<sup>60)</sup>。

この満州旅行の真の目的は、1937年（昭和12年）7月15日～17日に開催された建国大学創設準備会議に出席するためであった（図2）<sup>61)</sup>。『建国大学年表』には「新京軍人会館大講義堂において、3日間建国大学創設委員会（委員15名）が開催されて、建国大学創設要綱および建国大学令案を議決す」と記録が残されている<sup>62)</sup>。寛は日本側の学者4人（西晋一郎・寛克彦・平泉澄・作田莊



図2 建国大学創立準備東京委員会記念写真(写真下段中央が寛克彦)。1937年(1937年6月18日～20日)。

一)の1人として参加している<sup>63)</sup>。

寛は会議の席上で建国大学を皇帝直属の文教科院とすべきであるという案を提唱するが、「満州国」側の委員であった星野直樹国務院総務長官、関東軍参謀片倉衷らの反対で実現しなかった。反対者の一人であった片倉は「私の印象では、寛先生の議論はやや日本的でしたね。満州へ持ってゆくには少し日本色が強すぎる」と寛の見解に否定的であった<sup>64)</sup>。星野直樹もまた、建国大学の設置に関して「(満州国-引用者注)政府が責任を取れんでは困る」としてこれに反対した<sup>65)</sup>。同じ創設委員の一人である平泉澄は「寛

先生が日本の理想を満州にもってゆくといっても、そのまま持ってゆこうというのではないのです……(日本側創設委員の-引用者注)四人の議論は非常に熱心でも、基礎は違ってはいませんでした」とやや寛に同情的な意見を寄せているものの、結局「満州国」側の意見に圧されて寛の建国大学皇帝直属案は却下された<sup>66)</sup>。建国大学の総長は「満州国」国務総理、副学長(実質総長)は作田荘一が就任することになった<sup>67)</sup>。

『建国大学年表』によれば、創設後の建国大学に寛は殆ど関わっていない。寛と大学との関わりを確認できるのはわずか二つの出来事のみで



ある。まず康德七年度（昭和十五年度 1940年2月28日）に、来日して伊勢神宮を訪ねた建国大学の学生たちに宇治山田で講義をしている<sup>68</sup>。また、同年の「後期第一学年学科目」では、「神道」の半単位分を担当している<sup>69</sup>。しかし、寛と建国大学の関わりが記録上認められるのはここまでである。後述するように寛は1944年に渡満して溥儀に進講を行っているが、名誉教授として建国大学を訪れたという記録は残されていない。

また、建国大学の教授陣については大半が作田の門下生で占められており、寛の弟子は青本敏彦ただ一人であった<sup>70</sup>。その青本にしても、前職は満州国協和会中央本部人事科長であり、建国大学での仕事も建国大学理事官、塾務科長としての仕事であった<sup>71</sup>。研究教育分野には殆ど関与していなかった。結局創設員の一人でありながら、寛は建国大学の運営や教育に殆ど関与することはできなかつたのである。

結局のところ、寛は建国大学の創設委員ではあったものの、そこで求められたのは東大名誉教授の肩書であり、建国大学創設の箔付け要員に過ぎなかつた。弟子も大学事務の要員としてしか用意できず、建国大学の運営には殆ど影響力を与えることができなかった。

#### 4. 植民地における寛克彦の活動（2）—満州国皇帝溥儀への進講（1944年）

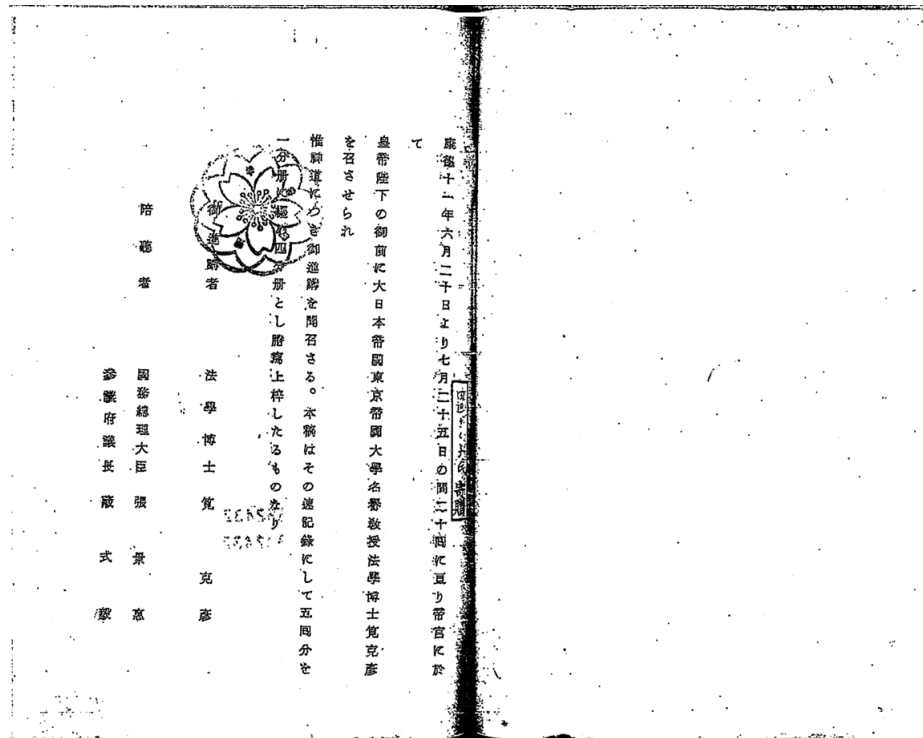
その後戦況の悪化もあって寛と植民地の関係は一旦途切れるが、1944年に思わぬ転機が訪れる。満州国皇帝溥儀への進講である。進講を行った時の社会情勢としては、既に「滞在中本土は空襲にさらされ、東条内閣は倒れ、小磯内閣となり、関東軍も本土防衛のため、満州から大部隊を上げるなどの大騒ぎとなり、朝鮮海峡も敵潜水艦の勢力下」にある極めて惨憺たる状況であったが、寛は息子の泰彦と共に満州に渡り、無事帰還している<sup>72</sup>。進講の背景として、「関東軍あたりに指金もあることと考えられましたが、

父（寛克彦—引用者注）はこの機会に自己の正しいと信ずる考えをそのままに進講」しようとした。さらには「その進講では、根本からではありませんが、随分現実の戦争に対するきびしい批判も」行ったと寛泰彦は述べている<sup>73</sup>。

当時の進講の記録についてであるが、現在学習院大学図書館に当時の速記録が一冊残されている。その速記録は『惟神之道御進講速記録 第一分冊』である（図3）<sup>74</sup>。速記録には「康德十一年（1944年—引用者注）六月二十日より七月二十五日の間二十回に亘り帝宮に於て 皇帝陛下の御前に大日本帝国大学名誉教授法学博士 寛克彦を召させられ 惟神道につき御進講を聞召さる。本稿はその速記録について五回分冊に纏め四分冊とし謄写上梓したるものなり」と記されており、陪聴者として当時の満州国國務総理大臣の張景恵と参議府議長臧式毅の名前があがっている<sup>75</sup>。貞明皇后に行った『神ながらの道』の進講は公式には8回なので、単純に比較した場合その講義の量は2倍以上となる。現在学習院大学図書館には第一分冊（第一回～第五回）のみ所蔵されている（田辺さく子氏寄贈）<sup>76</sup>。

進講では毎回講義終了時もしくは開始時に、講師と陪聴者は皇大神宮と建国神廟に礼拝している<sup>77</sup>。その際には「二拝 二拍手 天晴レ アナ面白 アナ手伸シ アナ明ケ オケ 二拍手 一拝」と寛の考案した礼拝方法を用いている<sup>78</sup>。内容については結論から言えば、『神ながらの道』の緒言から第一・二・三章までの内容（講義二回分）と大きく異ならない。しかし、『速記録』には「惟神道には五つの門（人口）が開かれて」いるので、惟神道を知るためにはこれら「以上の五つの門の方面」すべてに入らなければならないと説いている<sup>79</sup>。これは『神ながらの道』には見られなかつた新しい説明方法である。なお、現存する『速記録』では、神について語る晴天門（第一門）のみを取り扱っている。以下講義の概略について述べたい<sup>80</sup>。

第一講（6月14日）は「神ながらの道」とは何



惟神之道御進講速記録 第一分冊目次

御進講第一回	至	自	一	二
同	至	自	一	二
同	至	自	一	二
同	至	自	一	二
同	至	自	一	二

図3 惟神之道御進講速記録 第一分冊

かについて説明している。「こころのまこと」「みこと=命=神」を表す手段として「神ながらの道」は存在している。そして、「神ながらの道」は個人だけでなく、国家そして世界全体の生命を表

現するための方法なのである。つまり、「神ながらの道」は天地すべてを輝かせるいのちの運動であると寛は述べている。

第二講（6月23日）は、「神ながらの道」の礼

拝とその意味についての概説である。「天晴れ。あな面白。あな手申し。あな明け。おけ」を唱え、御辞儀や柏手を打つことで「こころのまこと」「みこと＝命＝神」を自覚する。寛の言うところによれば、これら「こころのまこと」「みこと」を自覚すれば、生命＝神の表れとは水の性質変化のように多種多様であり、様々に表現されていることを発見する。

第三講（6月24日）は、観念と事実の表裏一体性について論じている。神はどこにでも表れているので、それを知れば観念と事実が表裏一体であることに気付く。この観念と事実の表裏一体性を知ることができれば、神人合一、さらには祭政一致、理想と現実が共に絶え間なく連動している一体のものであることに目覚めていくと寛は述べている。

第四講（6月27日）は、天と人と地の関係が秩序に基づいているということを講義している。天之御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神など神の表れは様々であってもそこには秩序がある。このいのちの秩序（本末）を自覚することによって秩序だった組織ができる。また、この秩序を意識した組織をつくりだすことによってはじめ、私たちの生命を団体として組織することも可能になると寛は語っている。

第五講（6月28日）は根の国 葦原 高天原の三世界についてである。世界そのものにも秩序がある。根の国（情実界＝感情）、葦原（現国＝現実）、高天原（霊界＝理想）の三つの世界はそれぞれの世界の秩序を重視しながらも、お互いに働きかけている。それは生命の働きそのものである。寛に言わせれば、木々が芽吹いたり、種が発芽することもまた、世界における大きな生命のはたらきの表れなのである。

このように講義の概略としては、「神ながらの道」がどのように自らと世界の生命を輝かせるのかについて触れられている。内容については、現在閲覧できる第一分冊については、先述したように『神ながらの道』の前半とさほど変わら

ないものであった。

それでは、肝心の溥儀自身への影響はどのようなものであったのであろうか。例えば、貞明皇后は寛の進講を受け、『神ながらの道』を内務省神社局から出版させている<sup>81)</sup>。果たして貞明皇后は寛の熱烈な支持者となったが、溥儀にも同じように影響を与えたのであろうか。答えは否である。溥儀は進講の様子を『我が半生』に次のように記している。

私と傀儡の大臣たちに「神道」思想を受け入れさせるため、日本関東軍はめんどうもいとわず、わざわざ著名な神道家寛克彦（日本皇太后の神道講師だということだった）を招いて、私に進講した。この神道家は講義のとき、いつも奇妙キテレッツな教材を持ってきた。たとえば一枚の掛図で、一本の木が描いてある。彼の話では、この木の根は日本の神道と同じで、上の枝は、各国のいろいろな宗教である。いわゆる八紘一宇という意味は、すべてが日本という祖先に源を持っているということなのだ。また一枚の紙には一杯の清水が描いてあり、そのそばに醤油の瓶・酢の瓶などがいくつ立っている。清水は日本の神道で、醤油や酢が世界の各宗教、たとえば仏教・儒教・道教…キリスト教、回教等々だという。日本の神道は清浄な水のようなもので、他の宗教はすべて日本の神道に源を発している、というのである。そのほか奇妙な話がいろいろあったが、くわしいことはもう忘れてしまった。要するに、私がのちに聴いた一貫道の言いかたとかなり似たところがあった。講義を聞くとき、日本人がどう考えたかは私は知らないが、私自身と傀儡大臣たちは、いつも笑いたくなるのを押さえきれなかったし、眠ってしまう者さえあった。あだ名を于深澱は、「道」の講義を聞くたびに首を横に曲げていびきをかいた<sup>82)</sup>。

上記の回想の講義内容は、速記録の内容にほぼ対応している<sup>83)</sup>。このことより、溥儀が実際に進講を受けていたことは明らかであり、「忘れた」といいながらも内容を正確に記憶している。しかし、寛の進講は溥儀にとっては受け入れられるものではなかった。

『わが半生』は中国政府の再教育の成果として作成されたものであるため、それを考慮する必要はある<sup>84)</sup>。また近年の研究によれば、「満州国」における中核的神廟となる満州国建国神廟の建設を、溥儀自身が積極的に推し進めていたとも言われている<sup>85)</sup>。だが、『わが半生』にみる寛の感想は、若干の言葉の異同を除けば新しく編集された全本版でも変わっていない<sup>86)</sup>。溥儀は寛に代表される神道の思想を、イデオロギーとしてある程度使えるとは考えていたかもしれない。だが、結局のところ、帝国としての序列を形成し、教化する思想である寛の思想は、溥儀をはじめとする「教育対象」にとっては受け入れ難い思想だったのである。

## おわりに

寛が常に語りかけていた対象は、満州国皇帝溥儀やその閣僚への進講を例外とすれば、常に植民地の教育会や移民村などで、内地から植民地に渡ってきた人たちばかりであった。本当の意味で植民先の人々に対して訴えかけることはしなかった。また溥儀たちにしても、寛の講義は「満州国」は日本の天皇に「帰一」すべきであると説くものであるため、到底納得できるものではなかった。

このように考えれば、寛の議論は所詮大勢に意味を与えなかったと看做すことができるかもしれない。だが、寛の思想のなかで最も特徴的なのは、天皇崇敬システムのなかで序列を形成し、教化の思想として終始振舞い続けた点にある。寛は自身のイデオロギーである「神ながらの道」を説き、天皇を仰ぐ日本古来の神道（古神道、神ながらの道）は生命すべてを天皇の下

に輝かせる宗教であり、それを信じれば皆がまとまると戦後に至るまで一貫して主張していた。寛自身が植民地に抱いた率直な感想は優れた日本人対劣った植民地の人間という、当時の「常識」に従ったものであった。だが、そのように精神的に経済的に劣った植民地人であるからこそ、日本から来た内地人が模範として振舞い、教化しなければならないと説き続けたのであった。

このように教化主義的な植民地統治論は、内地から派遣された官僚や軍人たちを大いに勇気づけた。それは、朝鮮、台湾及び満州の行く先々で寛が同胞から手厚い歓迎を受けていたことから明らかであろう。また、台北帝国大学教授であった中村哲によれば、台湾の政治家や官僚には寛克彦の支持者が多かったと述べている<sup>87)</sup>。内地から来た日本人を勇気づけ、教化主義の正しさを説く寛の教えは、彼らにとって実に耳あたりの良い言葉に聞こえた。

しかし実際の満州の「国家運営」では、建国大学の創設委員を依頼されたものの、満州国首脳からは実質的な学校事業には適さないと判断され、拒絶されてしまった。また溥儀にとっても、「満州国」をあからさまに日本の天皇の下位に置く寛の議論は到底受け入れられるものではなかった。彼が唱えた帝国内における国民の序列化の思想は、一歩外を出ればたちまち行き詰まってしまうものであり、あくまで内地出身のエリートたちの自己正当化のためにしかならないものであった。

だが、記紀神話を援用し、内地の人間が植民地を導くことで日本と植民地の序列を正当化し、植民地の人間を天皇の下に「帰一」させる理論を準備したことは、「内向き」に帝国日本の正当性を主張するには十分であった。そしてこの理論は、加藤や山崎、守屋、石黒たち教え子や影響を与えた人々に対して、自らの事業を正当化させる論理を与えた。寛が植民地に与えた本当の影響とは、彼ら内地出身のエリートに自己正当化の知的枠組みを与えたことにあると言

えるだろう。この「内向き」の知的枠組みこそが、却って彼らを勇気づけ、日本人のコミュニティーの中だけで通じる自己正当化のアイデンティティーの形成を手助けしたのである。

※旧字体は新字体に適宜改めた。

※謝辞 本研究はJSPS科研費「帝国日本と身体技法—寛克彦「日本体操」とその受容—」(番号: 26・2279)の助成を受けたものです。

## 注

- 1) 加藤完治「私の歩んで来た道 (その二)」『学士会報』695号、1967年。満州移民と加藤の関係については、上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』(中公新書、1973年)、嵯峨井健『満州の神社興亡史—日本人の行くところ神社あり』(芙蓉書房出版、1998年)。
- 2) 加藤完治と寛克彦が出会ったのは山崎が校長を務めていた安城農林学校である(加藤前掲「私の歩んで来た道 (その二)」24頁)。また、山崎自身も寛から強い思想的影響を受けていた(中村太郎編『神風義塾記念記』神風義塾同人の会、1996年)。山崎と寛の関係については、青野正明『帝国神道の形成—植民地朝鮮と国家神道の論理』(岩波書店、2015年)に詳しい。
- 3) 守屋栄夫は『仏教哲理』をはじめ寛の初期の著作の校正を担当している(寛克彦「仏教哲理小引」『仏教哲理』有斐閣、1911年)5頁。また、寛が朝鮮訪問中体調不良を訴えた際には、進んで自宅を提供するなど甲斐甲斐しく面倒をみている(1922年7月21日『吾家之歴史』〔国文学研究資料館蔵「守屋栄夫文書」〕)。守屋栄夫の研究としては、松田利彦「朝鮮総督府秘書課長と「文化政治」—守屋栄夫日記を読む」松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』(思文閣出版、2009年)。
- 4) 寛は高松四郎の遺稿集に追悼文を寄せている(寛克彦「序文」高松忠清編『松廼舎遺稿』私家版、1960年)。高松と寛の関係については、樋浦郷子『神社・学校・植民地—逆機能する朝鮮支配』(京都大学学術出版会、2013年)。
- 5) 井上孚麿(1891年～1978年)は台北帝国大学文政学部教授を経て、国民文化精神研究所所員になっている(戦後は日本国憲法無効論を唱え、亜細亜大学教授に就任する)。井上孚麿は寛が主催していた雑誌『皇学会雑誌 神ながら』の常連であった(例えば、寛克彦「台湾なる友に寄す」『皇学会雑誌 神ながら』4巻5号、1931年)。増田福太郎(1903年～1982年)は台北帝国大学理農学部教授で法学者。台湾の宗教や民俗について独特の研究をしていた。井上と増田福太郎の台北帝大教授就任の経緯については、松平徳仁「植民地主義と立憲主義の齟齬と共振—二つの「台大憲法学」を素材に」(酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014年)。また、寛と台北帝大のつながり、特に増田福太郎との関係については、呉豪人「植民地の法学者たち—「近代」パライソの落とし子」『岩波講座 帝国日本の学知 1巻 帝国編成の系譜』(岩波書店、2006年)。
- 6) 磯前順一「植民地朝鮮における宗教概念をめぐる言説編成」(磯前順一・尹海東編『植民地朝鮮と宗教—帝国史・国家神道・固有信仰』三元社、2013年)。
- 7) 青野正明『帝国神道の形成—植民地朝鮮と国家神道の論理』(岩波書店、2015年)326頁。
- 8) 前掲の青野氏の本では、寛については特に第三章「「敬神崇祖」と国家神道の論理の確立」で言及している。
- 9) なお寛自身は全く言及することはなかったが、その親族も台湾や中国と深いつながりをもっていた。父寛朴郎(?～1925年)は大蔵省の官吏であったが、その官歴の最後に、台湾総督府臨時台湾土地調査局の要請により台中県弁務署長(1899年～1901年)を務めている(「非職長野県下伊那郡長正七位勲六等任台中県属」『台湾総督府職員録』第17巻、「台中弁務署長寛朴郎依頼免本官」『台湾総督府職員録』第17巻)。また、寛克彦の叔父の小沢豁郎(1858年～1901年)は、清仏戦争の際に駐在軍人として反清勢力と勝手に連絡をとったため(福州事件)、軍内で失脚、大陸浪人になっている。特に小沢の失脚は、幼少期に軍人志望だった寛の進路変更に何がしかの影響を与えたと思われる(田中正俊「清仏戦争と日本人」『思想』1967年2月号、小沢豁郎については、安岡昭雄「小沢豁郎と清仏戦争・清国観」『政治経済史学』500号、2008年)。小沢は福州事件で失脚後、同じ諏訪藩出身の政治家渡辺国武の側近となり、アジア主義団体である東邦協会発起人の一人となった。なお、小沢は渡辺千秋・国武兄弟の従兄弟である。
- 10) 日本政府の公的立場としては、「満州国」は独立国家であったが、実際には日本人の官僚と軍人によって支配されていたことから、本稿では

満州における笈の活動を、「植民地」における活動として扱うこととする。

- 11) 笈泰彦前掲「父笈克彦のことども」45頁。
- 12) 石黒は1922年当時朝鮮総督府内務局地方課長。守屋は総督府秘書課長であった。
- 13) 1922年7月11日及び1922年8月6日『吾家之歴史』(国文学研究資料館蔵「守屋栄夫文書」)。また、守屋の日記を抄録・刊行した『守屋栄夫日記』にも、1922年8月に笈が来鮮したことが記されている(守屋孝彦編『守屋栄夫日記』私家版、2005年、50頁)。
- 14) 1922年7月30日『吾家之歴史』(『国文学研究資料館蔵「守屋栄夫文書」)。
- 15) 笈泰彦前掲「父笈克彦のことども」46頁。
- 16) 1922年7月27日『吾家之歴史』(国文学研究資料館蔵「守屋栄夫文書」)。
- 17) 笈泰彦前掲「父笈克彦のことども」46頁。
- 18) 笈克彦「台湾旅行談」『皇学会雑誌 神ながら』3巻3号、1930年、51頁。
- 19) 写真「朝鮮平安北道新義州警察署に於ける署員の「やまとばたらき」法学士石黒英彦氏の伝へしもの(大正十一年夏笈克彦自ら撮影)」『神あそびやまとばたらき』(蘆田書店、1924年)450頁。笈の教え子であった石黒英彦は当時朝鮮総督府内務局地方課長であり、1922年の春まで平安北道の警察部長であった。
- 20) 笈克彦が考案した皇国運動／日本体操については、中道豪一「笈克彦「日本体操」の理論と実践」『明治聖徳記念学会紀要』復刊51号、2014年、西田彰一「笈克彦の思想と「日本体操」日本思想史学会、2013年報告。青野前掲『帝国神道の形成』第3章「敬神崇祖」と国家神道の論理の確立」130～132頁にも天晴会(朝鮮神宮を奉斎する教化団体)における皇国運動／日本体操の実践について言及がある。また筆者も現在宮中における日本体操の実践について別稿を準備中である(西田彰一「笈克彦「やまとばたらき(皇国運動／日本体操)」の分析—明るき国家の肯定と身体技法—」『日本思想史研究会会報』第32号、2016年掲載予定)。また、樋浦郷子氏の研究によれば、石黒は朝鮮神宮宮司である高松四郎(石黒や笈の推挙で就任)と共に、朝鮮神宮の社格向上運動や檀君奉斎論を退けた朝鮮神宮祭神論争に関わっている。  
さらに、石黒は朝鮮神宮における「天晴会」(あっぱれかい)の設立を提唱しており、朝鮮神宮参拝、「少年乃木会」の育成、神職講話、笈克彦の「皇国運動(やまとばたらき)」の実践等を毎月行っ

ていた(樋浦郷子『神社・学校・植民地』(京都大学学術出版会、2013年)50頁、青野前掲130頁～132頁)。

- 21) 西田前掲「笈克彦「やまとばたらき(皇国運動／日本体操)」の分析」。
- 22) 笈克彦編『神あそびやまとばたらき』(蘆田書店、1924年)、中村前掲『神風義塾記念記』。内原訓練所史跡保存会事務局編『満州開拓と青少年義勇軍 創設と訓練』(内原訓練所保存会、1999年)。
- 23) 笈克彦『日本体操』(春陽堂、1929年)204～205頁。
- 24) 同上23頁。
- 25) 同上41頁。
- 26) 同上、153頁。
- 27) 同上153・154頁。
- 28) なお、朝鮮半島で石黒と共に過ごした日々は笈にとって忘れがたいものであったようで、後年満州に向かう途上で読んだ歌にも、その頃の出来事が書かれている(笈克彦「満州行」『皇学会雑誌 神ながら』10巻8号、1937年、9頁・28頁)。
- 29) 笈克彦「国体精神と台湾」『皇学会雑誌 神ながら』3巻4号、1930年、41頁。おそらくは当時台北帝国大学法文学部教授であった井上孚麿を通じた講演の依頼と思われる。
- 30) 笈克彦「台湾旅行談」『皇学会雑誌 神ながら』3巻3号、1930年、51・53頁。
- 31) 同上、53頁。
- 32) 同上、53頁。
- 33) 同上、54頁。
- 34) 同上、55頁。
- 35) 同上、54頁。
- 36) 笈克彦「国体精神と台湾」『皇学会雑誌 神ながら』3巻4号、1930年、48～49頁。
- 37) 同上、49頁。
- 38) 笈克彦「台湾神社の御祭神に就いて」『皇学会雑誌 神ながら』4巻5号、1931年、39頁。本稿は『皇学会雑誌 神ながら』の4巻(1931年刊行分)に収録されている論文であるが、『台湾警察時報』4号に1930年1月16日に警察の職員並びに練習所の甲・特科生に対して、笈が「台湾神社の御祭神に就いて」という講演を行ったことが記事に載っている。(「練習所通信」『台湾警察時報』4号、1930年、36頁)。論文の掲載は一年遅れているが、基となった講演そのものは1930年の渡台時に行われている。
- 39) 笈克彦『神ながらの道』(内務省神社局、1926年)395頁～514頁。
- 40) 笈克彦「台湾神社の御祭神に就いて」41頁。

- 41) 同上、43・44頁。  
 42) 同上、44頁。  
 43) 同上、43頁。  
 44) 同上、48頁。  
 45) 同上、51頁。  
 46) 同上、54頁。  
 47) 同上、57頁。  
 48) 同上、58頁。  
 49) 同上、59頁。  
 50) 寛克彦「国体精神と台湾」『皇学会雑誌 神ながら』3巻4号、1930年、41頁。なお、1937年の渡満時には娘婿の正木慶秀が同行している（寛克彦「満州行」『皇学会雑誌 神ながら』10巻8号、1937年、22、23頁）。
- 51) 寛克彦「旅順白玉山納骨祠に参詣したる時」『皇学会雑誌 神ながら』2巻9号、1929年  
 52) 寛克彦「台湾旅行談」『皇学会雑誌 神ながら』3巻3号、1930年、52頁。  
 53) 寛克彦「満州行」『皇学会雑誌 神ながら』10巻8号、1937年、24頁。  
 54) 同上、3頁。  
 55) 同上、10頁・20頁。また旅行の日程と面会した人物については、同行者であり娘婿でもある正木慶秀の「満州紀行」を参照した。（正木慶秀「満州紀行」『神ながら』10巻8号、1937年）。ちなみに満州移民村第一号の弥栄村の弥栄（いやさか）は、寛が万歳の代わりの文言として提唱した弥栄に由来している（寛克彦「「いやさか」の発声」、同「「ばんざい」と「いやさか」と」寛克彦編『神あそびやまとばたらき』蘆田書店、1924年）。
- 56) 同上、21頁。  
 57) 同上、10頁・21頁。  
 58) 寛克彦「国民高等学校生徒を満州へ送るの辞」『皇学会雑誌 神ながら』5巻9号、1932年、78～79頁。  
 59) 正木慶秀「満州紀行」『神ながら』10巻8号、104～105頁。  
 60) 寛前掲「満州行」21頁。  
 61) 湯治万蔵編『建国大学年表』（建国大学同窓会、1981年）巻頭（写真下段中央が寛。写真は出発直前に東京で撮影した写真）。なお建国大学の創設委員会が新京で開催された日は、日中戦争（盧溝橋事件：1937年7月7日）が起きて一週間後のことである。  
 62) 同上、41頁。なお、この際寛は飛行機で満州に移動している（寛前掲「満州行」）。  
 63) 創設委員に選ばれた4人の他の経歴は次のとおりである。
- 西晋一郎は（1873年～1943年）広島文理科大学の倫理学教授。同時代では西田幾多郎とも並び称される倫理学会の重鎮であった。  
 平泉澄（1895年～1885年）は東京帝国大学文学部教授。彼の提唱した国体護持を説く歴史学は「皇国史観」と呼ばれ、戦前の歴史学会を席卷した。作田荘一（1878年～1973年）は京都帝国大学の経済学教授。  
 『建国大学の研究』によれば、この4名が指名されたのは主に平泉の推薦による（385～386頁）。また彼等が創設員会として選ばれた目的は、日本の委員たちで議論を主導することを目的とした陸軍の計画で、石原莞爾のアジア大学構想潰しだったとされている（386頁）。
- 64) 湯治前掲『建国大学年表』43頁。  
 65) 同上、45頁。  
 66) 満州国史編纂刊行会『満州国史 総論』謙光社、1970年、593頁。  
 67) 山根幸夫『建国大学の研究』汲古書院、2003年、386頁。本書によれば、作田が総長に選ばれたのは、西と寛が当時既に高齢であり、また日本陸軍が思想的指導者として平泉を手放したくなかったからとのことである（同、386頁）。
- 68) 「満州国建国大学渡満入学生特別訓練日程表」（湯治前掲『建国大学年表』210頁）。  
 69) 湯治前掲『建国大学年表』253頁。  
 70) 山根幸夫『建国大学の研究』汲古書院、2003年、156頁。  
 71) 同上、240頁。昭和十五年の建国大学学生逮捕事件の際には、塾務科長として事件解決に奔走している（「塾生検挙事件について—青本敏彦先生よりお話を聴く—」建国大学同窓会編『歡喜嶺遙か 上』建国大学同窓会、1991年）。
- 72) 寛泰彦前掲「父寛克彦のことども」49～50頁。  
 73) 同上、49頁。寛泰彦はこの進講に同行している。ただし、後述する速記録第一分冊には戦争を批判していると思われる記述はみられない。  
 74) 寛克彦『惟神之道進講速記録 第一分冊』（私家版、1944年）巻頭。以下単に『速記録』と略す。  
 75) 同上、巻頭。なお、溥儀の陪聴者として名が挙がっている張景恵（1871～1959）は満州国國務総理。臧式毅（1884～1956）は満州国參議府議長である。  
 76) 田辺さく子は、寛泰彦氏が学習院大学の教授を務めていたことから寛家の縁者であると思われるが、現時点では不明である。また最近になって、この講義録の全編が寛の娘婿である三瀧信吾ゆかりの団体に残されていたことが日本宗教

学会で報告されている（中道豪一「寛克彦の溥儀皇帝への御進講一稀観本『惟神大道』にみる神道論一」日本宗教学会2015年大会報告、なお報告者の中道氏によれば『明治聖徳記念学会紀要』復刊第52号に論文が掲載予定）。ただし現時点では私蔵本であるので、原本を公共施設で確認できるのは学習院大学図書館に保管されている第一分冊のみである。

77) 満州国建国神廟の建設をめぐる経緯については、小倉慈司・山口輝臣『天皇と宗教』（講談社、2011年）。樋口秀実「満州国『建国神廟』創設をめぐる政治過程」『東洋学報』93巻1号、2011年。

78) 『速記録』3-54頁。

79) 五つの門とその役割は以下のとおりである。（『速記録』1944年、2-40～2-43頁）。

第一門 晴天門 神について

第二門 昇日門 人（天皇様並皇族をはじめ臣民）について

第三門 家國門 家、国家（肇国の根本精神及び八紘一字）について

第四門 明道門 理、法、道（祭政一致、惟神道と諸宗教の関係）について

第五門 進進門 意気込み（元気を振り起して進んで参らねばならぬこと）について

なお、寛は神を拝む際に「天晴れ、あな面白、あな手伸し、あな清け、おけ」を唱えるが、それぞれ第一門が「天晴れ」、第二門は「あな面白」、第三門が「あな手伸し」、第四門は「あな明け」、第五門が「おけ」をそれぞれ分担していると述べている（『速記録』2-30～2-40頁）。

80) 以下第一講から第五講までの解説の内容は、すべて『速記録』の記述に基づいている。

81) 神ながらの道普及会「『神ながらの道』頒布に當りて」（『神ながらの道』付録、1926年）。寛克彦と貞明皇后の関係については、既に豊富な先行研究がある。原武史『昭和天皇』（岩波新書、2008年）、同『皇后考』（講談社、2015年）、小田部雄次『昭憲皇太后・貞明皇后』（ミネルヴァ書房、2010年）、小倉慈司・山口輝臣『天皇と宗教 天皇の歴史』（講談社、2011年）。中道豪一「貞明皇后への御進講における寛克彦の神道論一「神ながらの道」の理解と先行研究における問題点の指摘」『明治聖徳記念学会紀要』復刊50号、2013年。

82) 愛新覚羅溥儀『我が半生一「満州国」皇帝の自伝 下巻』（小野忍・野原四郎・新島淳良・丸山昇訳、ちくま文庫、1992年）97～98頁。一貫道は中国の清時代に成立した民衆宗教のことで

ある。

83) 例えば『わが半生』にみえる「また一枚の紙には一杯の清水が描いてあり～というのである」の記述は、『速記録』の「神様を水に御譬へ申し上げれば、純真なるH2Oであらせられます。純真なるH2OをただH2Oとして観念することに該当する神様は之を天祖と申し上げ、又天神とも申し上げます。」（2-49）の内容に相当している。

84) 溥儀の自伝『わが半生』は、1957年から1958年の間に中国共産党管理下の撫順戦犯管理所で再教育プログラムの学習成果として作成され、1960年に内部発行本として印刷されている（灰皮本）。その後、群衆出版社（中国公安部の出版社）が中心となり、李文達と協力して修正稿が作成され、1964年に出版された（定本）。日本語訳も1964年版の定本に基づいている（小野忍・野原四郎監修、新島淳良・丸山昇訳）。また、2004年に群衆出版内部で定本完成以前の原稿が発見されたことをきっかけに、定本で削除された記述を補い、版を改めたものが2007年に出版された（全本版）。こちらはまだ日本語訳は出ていない。塚瀬進は定本と全本版の違いとして、満州国皇帝に即位する天津時代までは記述がほぼ同じであるが、満州国時代からあらたに付け加えられた内容が増え、撫順戦犯管理所の記述が大きく異なると述べている（塚瀬進『溥儀一変転する政治に翻弄された生涯』（山川出版社、2015年）3頁～7頁）。

85) 樋口前掲「満州国『建国神廟』創設をめぐる政治過程」。

86) 愛新覚羅溥儀『我的前半生』（群衆出版、2007年）276頁。なお、該当箇所解説には総研大大学院生の栄元氏の協力を得た。

87) 中村哲「中村先生を囲んで」『沖縄文化研究』16号、1990年、385頁。中村哲は井上學磨の後任で、憲法学講座の担当として台北帝国大学文政学部政学科の助教授（のちに教授）に就任した（1937年～38年、40年～43年）。リベラル派として知られた南原繁の弟子である中村の就任は、寛の支持者が多かった台湾総督府や軍部の反発を招くものであった。台北帝大時代の中村哲については、荊部直「『始原』と植民地の政治学一四〇年代の中村哲」『岩波講座 帝国日本の学知 1巻 帝国編成の系譜』（岩波書店、2006年）。台湾帝国大学文政学部政学科については王泰升「台北帝国大学と植民地近代性の法学」に詳しい。（[publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH/series/kosh/.../article.pdf](http://publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH/series/kosh/.../article.pdf)）2015年11月19日アクセス。



# Activities of Kakei Katsuhiko in Japanese Colonies

## —with a Focus on Manchuria

NISHIDA Shoichi

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Studies

Kakei Katsuhiko is well-known for his advocacy of a unique Shinto philosophy and had a considerable influence on colonial government officials, Shinto shrine administrators and agricultural emigration leaders. In spite of his substantial influence, there have been no specific researches on the effect he had on Japanese colonies. The present study aims to review and analyze Kakei's activities in Japanese colonies with special focus on those in Manchuria.

In the first section, Kakei's fundamental stance on the colonies is reviewed with reference to his visit to the Korean Peninsula. In the second section, Kakei's hierarchical theory of the colonies is examined using a lecture he gave in Taiwan. The third and fourth chapters deal with the roles Kakei actually played in Manchuria, on which he left a major mark. Finally, I look at the reasons why Kakei was admired by the elite class in the colonies who has been sent out from the Japanese mainland.

Kakei is said to be a person who did not discriminate between the colonies and mainland Japan, but his view was clearly rooted in the then-prevailing idea of “a superior Japan and inferior colonies”; thus, for Kakei, people in the colonies had to be cultivated. He attempted to establish a hierarchy between Japan and its colonies in the name and to the glory of the Emperor.

In order to learn how Kakei responded to actual issues in the colonies, I look at his activities in Manchuria. Kakei served the *Kenkoku Daigaku* (National Foundation University) in Manchuria as a founding committee member. He also delivered lectures in the presence of the Puyi, the Emperor of Manchukuo. From his point of view, Manchurian culture was superior to that of Korea but inferior to that of Taiwan. He also believed emigrants from the Japanese mainland should play an important role in conveying Japanese spirit to Manchuria. However, he failed to produce the results expected of him in Manchukuo. Although he was a founding member of the *Kenkoku Daigaku*, his ideas were ultimately rejected by Japanese government officials in Manchukuo. Also, his lectures in the presence of Puyi were totally unacceptable to the Manchurians as Kakei outspokenly defined Manchukuo as a subordinate country under the rule of the Japanese Emperor.

The paper concludes that Kakei did not actually have much influence on realities in Japan's colonies. Nonetheless, Kakei was admired for his solid and unwavering stance by elite officials sent from the mainland. Kakei consistently asserted that Japanese ancient Shinto (Ko-Shinto, centered on the philosophy of “*kan nagara no michi*”) is a religion that leads all living beings to shine under the glory of the Emperor and that the empire could only be united when all its people believed in Shinto. His view of the people in the colonies being spiritually and economically inferior to people on the Japanese mainland led him to advocate that Japanese emigrants should become role models for the local people. Kakei's chief contribution to the colonies appears to have been the establishment of an intellectual framework for self-justification of the emigration of an elite class from the Japanese mainland. Such an “inward-looking” intellectual framework helped forge an identity only valid in Japanese communities themselves, but unacceptable elsewhere.

**Key words:** Kakei Katsuhiko, Shinto, Korea, Taiwan, Manchuria, Puyi, cultivation